

特115

857

THE BOMUYO

牧羊

第二卷 第二册

大村青年團



始



557

THE BOKUYŌ

羊牧

號二第 卷二第

團年青村家大

国立国会
51.10.1
図書館

74/15
857

論壇

目

青年団の一頁として

新井三郎

責任の自覚

町田イム生

偶感

長谷川宇太郎

妄想

順道生

作例

ジヤンケリストウの
一章

散文

次

希望

百姓

冬の夜

ホスト

作例

柳田種志

戯味

文子

漱石の猫の節

俳諧の連歌として

土屋枕石

詩壇

壇

冬の夜

たゞのみて

断絶

端歌

冬の夜のダンス
香月

和歌(秀逸)

俳句(秀逸)

作例

戯味

毛須生

忠雄

春雨

キーンソン

課題

論文

散文

題隨意又切三月廿日

詩壇

俳句 (題: 所選者)

日永

桃小星

雲雀

越川

夕コホ

枕石

其他は従前

又切俳句 三月廿日他

三月廿日

特別欄

私の好きな文章

(一人一章)

諸君が最も愛する文章を

原紙一枚以内

古今東西の区別なし



試に石を水中に投じよ而して生じたる波紋に就て觀察せよ波紋の廣狭は其の投石の大小に比例するなり

波紋の中心は波動強く而して中心を遠ざかりに隨て漸く廣く漸く弱し

波紋は須臾にして消失し投石は水底に在りて其水量を高むるなり

人各其の器に隨いて國家社會に對する影響に於て廣狭多少あるに想ひ到らば感ずる所果して如何

聖賢は曰く其の本乱れて末治まらざるは其の厚く其の薄くする所の音薄くして其の薄

くすくすの厚きは未だ之れ有らざるなりと。又佛典に曰く華
 の香は風は逆はず唯風に順ふて薫ずるのみ。徳の香は風は逆
 らぬ。従ひて天下は薫ずと。
 吾人須らく發奮興起して益々其の實力を養成すべし。又宜しく本
 末逆らざるを考量して愈々其の本務に努力すべし。
 果して然らば現世の幸福を増進すると共に次代の國民の幸福
 を爲す。其の基礎たるを得べきなり。
 吾人等 此の精神に名を留むるのみにて可ならんや。

* * * * *

特別欄



十 則

一 牧羊 第二卷 第二節

萬古一系の天皇を奉ずる國なり。開闢以來、未だ嘗て外國の
 辱を受けざる國なり。神國なり。天皇は現つ神にて、我は君臣
 情は父子の國なり。我國を除きては古界に斯る國なし。斯くと知
 りて國民は自重せざるべからず。歐米何者ぞとの意を根にきかすべ
 からず。されどと汝を自負して、夜郎自大となり、因に自ら甘ん
 ずべきに至らば、帝國と誤らむ。
 二 我等の祖先を辱めず。

我々の祖先は負けじ魂と有しき。正しかりき。実に勇みたりき。私を捨てて公に殉じたるとき、皇運を扶殖して今日あるを致したるとき、人生は一大運環なり。我等は公の遺訓を子孫とせらば連環絶えて子孫は闇の中に沈む。自身を犠牲して冥界を向しせず。

生に死すの烈しき今の古の中學の智力のみよても間に合はず。精神は最後は死に決す。身体頑健にして精力旺盛なるもの、勝を制して大に成す。精神を練って生死に動かす。

精神動かしは酔生夢死するに止まらむ。精神正しからずんば砂上に樓閣を造つるに止らむ。精神動かしは身はこれ浮草なり。煩惱を超越し、名利を超越し、進んで死を超越して精神始めて偉なり。大事を為すに足る。

使は深く知る。知識は用をなす。深からざる可らず。されど萬事に深きこと。知識は深からず。常識。備へて一事に深からば、社會に貢献して優に光彩を放つ。

六 一身を天職と捧ぐ

無能。大臣は模範。村長は如かず。人格。高下は収入の多少に以て判ずべからず。己れの適する所に己れの才能を發揮して國家に貢献する所あるものは生甲斐のあるものなり。

七 人を愛す

人を愛せざるもの。豈に親に孝養らむや。豈に忠をらむや。豈に誠實をらむや。豈に社會の進歩に資せむや。豈に身を立てむや。豈に國家を成さむや。一時の逆境に自暴をなして吾を恨むものは、これ自ら運命を呪ふものなり。八千辛萬苦の間に微笑す。

志は高からばし。腹は大きからばし。情は濃からばし。意は硬からばし。人生波瀾多く敵多く思ふまゝなる事多し。いんてんせず。卒に強く千挫屈せず。進まざる可らず。



論 壇

今を知りて古を知らざれば、浅し。古を知って今を知らざらば、も之に同じ。我國を知らざれば、他國を知らざらば、狭し。他國を知らざれば、我國を知らざらば、之に同じ。狭くして、狭からば、國衰へん。若くは、亡びむ。取るべきは、取り、棄つべきは、棄て、奪ひに化せずして、自立せざる可らず。流行を追はずして、外來の思想を吟味せざる可らず。

一 俯仰して、天地に恥じず。

不義の貴富は、浮べる雲の如し。利名に迷はず、虚榮を拘へられず、怠らず、油断せず。己れの分を盡して、心に疚しきことをなくんば、此在ながら、極樂往生なり。

x
x
x
x
x
x
x
x
x
x

君等之周囲を取りまく空氣は、一面に濃く且つ重苦しい。
 舊い吾界は陰鬱な汚された鬱團氣の中に弱められて行つてゐ
 る。忌む可き物質主義は諸の思想を破壊して、政府や人民の活動
 を等しく拘束して居る。吾界は息が止まつてゐる。それ卑しいとし
 て抜目のない利己主義の中は窒息しつゝある。
 窓を開け！ 天の自由なる空氣を導き入れよ！
 英雄的事業の靈感の下に集れ！

* * * * *
 * * * * *
 * * * * *

責任の自覚

エハ生

今時種々の思想は混頓として、我等は其の取捨に迷はざるを得ない。すべ
 るに感の易い我等青年は、あるものはAをとり、あるものはBをとり、個
 人の主張が強く、団体とは別、みよして、その団結は頗る薄弱の感がある
 と思ふ。団結、薄弱なる団体は烏合、衆である、何をか存さん
 せば武の吾をなくす論の存である。力の時である。今や吾が国は思想的
 危機にある。ではあるまいか。何々會談、何々條約と口は平和で實は
 内には燃ゆる敵視を持つまいか。彼等は常に思想を以て、建國の要
 素を冒さざる吾が国を浸さんとしつゝあるではないか。我等はさうし
 國家をたはね都會、農村と云ふ有累に心をかけて、堅實なる道
 まである。つぎは例は日あるが床の間の花瓶に花をさすにしても、花瓶
 の小ききに、大きな枝をさしたら、ひっくりかへるが見悪いかである。大きな
 花瓶へ水を枝を挿した時と同じである。床の間の大瓶によつて、

つり合ふ様うしたるを見よいのである。我らは人類の一分子であるが、
の国の一入たる農村の一青年である。責任、自覚、専心、努力、
それらはすべてを全うすることが出来るのである。農村、青年、何等はすべ
きことかある。我らは決心、努力、責任、自覚、専心、努力、
我らは専心、努力、責任、自覚、専心、努力、
此、責任、自覚、専心、努力、
いして専心、努力、責任、自覚、専心、努力、
家に対する責任である。我らは人として責任、自覚、専心、努力、
ある。青年、農村、青年、農村、青年、農村、

農 賦

長谷川 宗太郎

農村。道徳や習慣、
とも長い間、
やく、覚醒、
信出来る様になり、
と正笑と標榜してすべし、
事は都會の、
達、
に生きているための、
自分、
度毎に、
として、
して天晴超人、
生を呪ふ、
ことが出来ず、
習が悲しい、
る、

信出来る様になり、
と正笑と標榜してすべし、
事は都會の、
達、
に生きているための、
自分、
度毎に、
として、
して天晴超人、
生を呪ふ、
ことが出来ず、
習が悲しい、
る、

すべてを肯定するより外は方がなかった。それだけ恵まれた、幸福に推し
ししが出来た。此所に立脚しても、完全なる幸福は白痴にのみ与へられた
特権である」と云つた或人の言葉を肯定することが出来る。一日も否一瞬間で
も生き伸び度いそれは事実上死へ死へと陥いておる生物性に矛盾してゐると
は考へつゝも、人間的願望として私の抱いておる最大望である。
幸福に与るためには凡ての艱苦に挑戦したい、自己の幸福は他人の幸福の
上に建設すべく、私はすべてに切りしたい。そうした覚悟のもとに日夜常
常、勤く私は自分の腕を喰ひとか、憐人を愛せとか何千年かの昔に云つた、釋
迦やキリストの言葉とそのまゝ、信じ、自分の力に生き満足することが出来ぬ、
ほんとうに何も彼も忘れて働く其の刹那が眞の幸福であるとは、私の体験
したところでもある。(完)

x x x x x x x x

青年団の一員として

新井 三郎

人あり、爾く「青年団とは何ぞや」と、吾等団員として人をして此の奇問を祭
せしむるに至りたるは、実に心外なり。これど具に考ふれば、青年団の現状にこ
の奇問をまきの間隙なきにあらざるか。

奇問の人は更に云ふ、「青年団は競技団なり。青年団は競技會に使用せら
る、役員員の団体にして、其の出場するや優勝旗の獲得を以て是れ大事と
し、念頭更に余事なし。若し優勝を以て優勝旗を得人の喜々として、あはか
も童子に菓子と與へたるが如し。かくして、青年団の消長は出場競技者の双方
にかゝり、技藝者は青年団の消長を握る支配者なり。かゝるが故に技藝者の勝敗
は、其の青年団の内容を評價するバロメーターとならざるが如し。勝てると以て活
躍せしむる。敗るれば活躍せしむるをせらるる」。

此の奇問の人の言、甚だ青年団に對する僻見にして、當を失へる放言をうに似た
れども、其の皮肉にして深刻なる、観察は、現下青年団の現状を喝破して余蘊

なると云ひつべし。一人の選手の優越感を満足せしむる爲に九人の団員は其の趣味も個性も人格も犠牲にして、匍匐して選手を立たせざるべからず。現下青手団の現状は九人の肩車にのりたる選手を憐れと旗を打振る姿に似たるや。而して九人の下積となりたる団員の辛苦は認められずして、一人の選手の双手を誉めて喜ぶが歓声の声をみ聞ゆ。選手は勝敗は団員に些の榮典もなく吾痛もなし。此の両者の心理を同じからざるは、もとより明かなる。此水進時、競技會が対岸の火災視せらるる冷眼視せらるる所以あらん。

或る人此の狀態を露國革命前の社會組織に比す。団員に寒心に堪へざる所を、外に如くして青手団の聲を望む得べけんや。徒に外面の榮譽のみを流れて内にかまきるべし。威を外に伸べんとするはつゝ、し言へし。家康公の言に云ふ。勝つとせばかり知りて、負くこと孤知らざれば言責、身に至ると。青手団の聲、展隆言はれり。團員全部の結合に待たざるべからず。團員個々は各々、道に應じて、各其の長所を發揮すべし。

五ヶ條の御新言文に宣ふ

官民一途庶民、各々其の志を遂げん心ヲシテ、徳ヲガラシクシテ、ニトマシテ、
と、鉄血宰相ビスマルクの佛國を敗りて帰るや、其の戰勝の功を佛國人に與へず、
て却て教育家になしたりとの故事に以てばすや(完)

委員たるを取ります。

小島野 忠人

吾人は學藝部委員たるを取ります。少くも二十名弱の團員、
の一支部を指導す。代表すべき重且大なる責務たるに無材愚鈍を吾人
に、これに吾が支部の委員を御座るとは、宜實に一支部の体面も、
あらう。吾人は委員たるを取ります。勿論最初より吾人自身、
吾人支部のものも吾人は委員たる、責めたるはなかつた。此一
支部は支部員中最若者である吾人として、補欠委員たるも、
のほ去る年の四月下旬であった。團員として、誠々、
成經過すと雖も、愚鈍を吾人は團の組織だに知り得なかつた。如何

白痴を吾人といへ云へ如何にして此の重職を諾し得ようか。一の帝國を以て
て吾人に興へんとすも、吾人は辞して止まらなかつた。然れども一支部は是れ
て吾人の肉體を責めりし。

以て放任を爲す吾人は委員たるに當りて恥ず。此の重荷を背負ひて止
むなく學藝幹部に出入せり。昨秋の役員改選期にも、機會に此の職を
脱せんといふ吾人の計畫空しく、再び辞退すも水泡に帰し、吾人は再び
員たる器に役入されたのであつた。委員に委員たるを恥まず、吾人は委員
のうちに足らずたが名ある本像に過ぎず。本像委員たる吾人が献身一支部
の爲、本團の爲、盡瘁すと雖も、あたかも蠅の斧と振ふに等し。然れども吾人
が自ら誇りけ唯一つ春秋に富むの六七十歳の青年ある今日といへ云へ吾人の
青年とは吾人が除いて他にあるべきや、若し實共に青年たる吾人は帝國の後継
者であるが、本團の後継者であるんだ。あ、そうだと吾人は委員たるが恥ぢず

献身その道に励むが、吾人は奉げられた一支部の爲に、尚本團の爲にも。

団員諸賢よ、後援者各位よ、幼稚な本像委員たる吾人よ、努力の御後援
下さ水人ことば、筆がけがら伏して懇願する次第であります(完)

七五 信心 (一)

順 道 生

詩人曰く、天地鬼神を感動せしむる妙詩を作らんと欲すも好題目なし
と。説教者曰く、福音を傳へ、天国を此の世に奉さんとすも、求道者なし
と。実業家曰く、三菱と奴とし、三井が僕とし、ロスチャイルドと顔抗せんと
欲すも善き旨願けりなし、と。
嗟呼、また過れりと云ふ可し。詩人の詩人たる所以は好題目が獲むにあり、
説教者の説教者たる所以は、求道者が其の身に吸引するにあり。実業家
の實業家たる所以は、高級が手中に握るにあり。

七五 理想 (一)

我れ國の爲に討死せんと欲す。然れども戰場なき如何、或は死するも

仇を復さんと欲す。父仇をまか如何。我れ孔明たらんと欲す。劉玄德をま
か如何。我れ辨慶たらんと欲す。笑經をまか如何。是れ時と場合と
同する事柄をば。時と場合とに慎着也。すして妄想するものなり。此所謂
癡癡家存るものは。此類頗る少からずと知るべし。

妄想 三

我れ空中に飛翔せんと欲す。羽翼をまか如何ん。我れ地獄。道中記を作ら
んと欲す。宗内者なき如何ん。我れ楨杵もて地球を轉動せんと欲す。楨
杵の支えなき如何ん。我れ月球に旅行して嫦娥と會話せんと欲す。輕氣
球を造せざる如何ん。我れ十萬歳の長壽を欲す。不老不死。靈樂なきと
如何ん。

是れ決して做し得べからざる事。或做せんとて妄想するものなり。七妄想此より
至れば。既に祭壇と云ふべし。妄想は怠惰者の葛蔓也。妄想は淫經者の門戸
なり。妄想は横着者の安樂所なり。而して妄想は人にして精神的に自教

せしむる毒也。

人若し理に道は精進すま心正まうせば。知らず何の所にが妄想を容る
るの余地あるんや。

小人閑居して不善をなす。君子閑居して妄想に耽る。而して七妄想も亦不善
の別名なり。と氣阿がすや。

冬、景色

曠道生

山骨稜々雪外青し。一向冬景を描盡す。

冬景の愛すべきは自然の裸体をうに在り。野も山も川も木も皆其の衣服
を脱ぎ去りて、赤條々となりたり。彼等皆赤條々たり。故に野も山も川も
木も、此等各々其の特色を發揮するなり。

春融に夏茂し。青葉重々。野も山も川も木も否。乾坤萬里此日主其の所。
是れもまたより愧ぶべし。然れども天然の真美は。空手て皮にあり。此に待た
ず。

散女壇



吾輩は猫である。

名前付まじない。どこで生れたか、顔と見当がつかぬ。
 何でも薄暗いじめじめした所でニヤアノ、泣いておた事
 だけは記憶してある。吾輩はこゝでじめめて人間と云ふ
 事を見た。然るあとで聞くと、それは書生と云ふ人間
 が一番癡猛な種族であったそうだが。此の書生と云ふのは時々
 我々を捕へて煮て食ふと云ふ話である。
 然し、其の當時は何と云ふ考も無かつたから、別段恐ろしいとも思はず

音がした。但し彼の骨子に載せられて、スーと持ち上げられた時何だかフ
フとした感があったばかりである。骨子の上で少し落ち付いて、書き出しの顔
を見たが、所謂人間と云ふもの、見始めであらう。

此の時妙なものだと思つた感が今でも残つてゐる。第一もさもつて仕衣
飾さ水びきりの方の顔がワル／＼して、まるで藥罐だ。

其の後猫にも大分違つたが、こんな片輪には一度も出會はずとしたこ
とがない。加之顔の真中があまりに突出してゐる。それして下はワ
クの中からは時々ブ／＼と煙を吹く。どうも煙を吐いて、実に弱
つた。是れが人間、飲む煙草と云ふものであることは此頃、頃新く
知つた。

x
x
x
x
x
x
x
x

冬の夜

小島 歎

二人は戸外に出た。冬の月は天空に凍り付いて居る様だ。澄みきつた。そして冷たい
光が私達を包む。寒いね、友が突然つぶやいた。全く寒いね、私は驚愕しては答
ひるより外を歩いた。そして思ひついたやうにマントの襟をかき合せた。

彼方の森は死のそれ。如く、灰色の姿にし、彼方に明滅する灯は死せるもの、靈の如く
に私には見付れて居らなかつた。二つの影は黙々として唯白く冷たい火の二を
みしめる下駄の音のみがあたりをひびくだけだ。ほんとは静かだ。ほんとは思
ひ夜だ。私の手にしてゐる燈は白く輝いた月光の前にはその存在を知らぬ
様だ。此の歩んで居る友は足を止めて、俺が呼んで見やうと、かう云ふ。此の
方を振りかへて、窓の中はしんとして静かだ。戸の透間からは、
最正面に見えぬだけだ。此の時刻に眼覚めて寒く凍つた夜を歩かせる
は私達二人だけであらう。友は軒端にたすんで一寸ためらつて居たが、
「御用心なさい」とぶつきたら、ぼくに叫んだが、家の中はしんとして、
「さうさう」といふ。唯鶏が二重を破ら水てが、いさふさしく又嘲ける様に、
「とく」といふ。

又静かにきく。今一度呼んぞ。函事がない。友は私の方を振り返つて、よくわ
てふよしとがすかに笑つた。私は無言のまじり、と立つて居た。寒うはひし
如し。身にしむ。そしてぞく／＼と寒け立つ。私は大声でゆけ。気味に叫んぞ。
そして耳を澄すと、奥の方からぬむせうなうのなき声で答へる。それでも私は一
度叫んで見た。月は何時の間にかうらや雲の中にかくれてゐた。燈は絶える様
身も私達の足もとに投げて居る。時々息づくやうにふつと暗くなる。二人は
竹と竹との間の細い道を歩んだ。竹に影が見え居たのだらう。小鳥が私達の
の足音におどろいてか／＼と鳴く。心は無言のまじり、うらや暗い。そして冷た
い道を歩みつづけた。(完)

ポストの前の子立ちて

武蔵文三

僕はポストの前になつて何時でもしんをこころと思ひあすりてゐた。
全国何れか都府にも町村にもポストの備のないところは少ない。此の通り手紙
を投入し、其の手紙が必ず父母なり、恩師なりの手許には届くのであると
云ふことと信じ且つ疑ません。それは郵便局員の忠告の事。それこそ又
配する政府の力。それこそ統一する国家の力を信じてゐるからであります。若

しも一通手紙を差出すにもそれが果して届くであらうか否かを言遣つて躊躇
し、左に水がならぬ事にならぬとありませう。唯此の一事だけでも如何に不安
になる事でありませうか。今僕が一通をポストに投入する刹那も国家的
的生活を思ひ国家の恩恵を感謝せざるは居られませぬ。雨辰災後特に比
の感を深くしました。(完)

希望

此 止

羊改り野辺の草木はさび々として甘明え出で。梅香り柳畑の頃となつたが
私は未だ希望は達せられなかつた。そして希望は煎茶の小さい物に、じり
付いてゐた。オリ／＼と澄み透つた空。そして小鳥は鳴けど私ハート
はおどろかされた。それ、然る程の瞳子は希望の色が見えて居た。
忍びよる黄昏の闇。そして短かき青春の一日は暮れて行くのであつた。(完)

百姓

柳の柳志

俺は百姓だ。

百姓をしなければ食つて行けぬ身の上だ。だが嫌だ。しむ／＼朝から晩
まで汗水流して働いて居てもい／＼不足する日を送つて居るからだが

古今の言に「農は国の基」とやら、粟して吾界、以て何さ食して生きて行くか、此百
吾々の製する米麦を食して生きて行くのだ、そうだが此水も人氏を助ける
為の職だ。天災の職と思つて、今より一層農業に力を入水進歩に進歩を
加へて奮勵努力をすむべしだ。

缺を待つ傍には又藝に重きをいし、もつと、もつと學藝部を發展さ
せ度いと思つてゐる。(貞)

俳諧の連歌につきて

土屋 枕 石

既に屢々同好の諸君から俳諧について知、居る範圍之極く平易
に説明せよとの仰せと承つて居たが、今回本誌から逐次發表するの機
會を得たことと光榮とする勿論、研鑽の極く浅い頭からやるとし、出
た事と古い手帖から書き換へた自信のない事だらけに、其の真は御託と
する念し懇望に甘へて何号にか真つて書いて見たいと思ふので、幸に御参考
になつて俳諧について継続的に共々相携へて研究下さいます方が何人であ
れば結構です。

以下速ふる竹のもの旧俗論にとらはれたり、或は形式計り重く見たりするなど
面白くない点もあらうと思ふが先づ拙日は夫々の形式と取つて順次範圍と
擴めて進歩した域にまで行つて見たらと思ふ。

(1) 俳諧の(一)巻(歌仙行、四十四行、五十韻、七十二候、米字百韻等)
最も普通の座(巻と歌仙行又は鯉鱗行など)を長句短句合せて

三十一句を以て終り即ち

一の表六句 一の裏十二句 二の表六句 二の裏十二句 其の中定座として月(三句)と花の(三句)句は必ずなくはならぬことになり(勿論破格もあるが)なる。

目
一の表 五句目 (秋季の月但し都念によつては冬の季の月となつてあり)
二の表 七句目
三の表 十一句目

花
一の表 十一句目 (勿論前月花の句とも似寄ぬべき可なり)
二の表 五句目

右の例(林作)

一の表 五句目「月の頃賑かにて又静かし」
二の表 七句目「我度由直したる月見の茶」
三の表 七句目「供進も酒と力に歸路の月」
一の裏 十一句目「花にきて鳴も鳴も遊ぶ波」
二の裏 五句目「道々する繚も花も橋も良し」
月花の例句を別々に分けて引附したものは、両方とも一巻として考ふるに似通ふやいな突かあつて面白くない。つまり一巻と通して見て同じやいな体があつてはなぬか。

月花の外(巻中は意の句もあり或は春夏秋冬の句類句軍体人名地名其他其の時其の折に由り何を以て附くかは漸次述べることとするが)一巻を眺めて同じ様な意味の句がなく三十一句各別体となし三十一体として変化のある然もどこにか係りあつた作とよしとしてぬ。そして始の句(五句)が梅の句なり其の巻と柄の巻春日句なら春日の巻と名づける(座何人居ても次から次へ取つて附けて行く所に面白がかり普通通に附け合はれぬはれぬもこんな譯だらう)

(2) 去り嫌ひ

表六句文で作り捨てるにはこの去り嫌ひはなげ歌仙行以上となりと特別の巻の外は去り嫌ひがあつて表六句の中へは出してはならぬものがあるそれは

神祇 釋教 感 無常 速懷 人名地名 病体 軍体 など或はことごとく忘らるる其の外尚 同字並に同季の句は五句去つてから。植物は三句去り。竹は二句去り(草と木は如し)生類人倫も亦植物と同じ(魚と虫は如し)其他打ち誂しといふことと嫌ふ即ち 二句前に月があつて夜といふやうなもの

(3) 立て句(連歌の起りとなる始り句)

この立句となる(ま)句はなほぐ穩で余韻のある句と好いとすべし

拙作(余韻もなほ只例として)

○山茶花の垣に干しある布巾かき

○放れ惜しきうに過ぎけり月の雲

(4) 脇句(才二句目)

脇句は平句の附とは韻と異にし発句の余韻と受けて結ぶと格とす漢詩の起句に於ける承句と同素なり 脇句の附方など云ふが要はこゝ意に外ならぬ
前例

山茶花の立句へ……時折曇る冬の朝過

月の句へ……虫に心と澄す宵内

てにはし留め作法あれども其は功者の業で確と文字面に於自ら脇句(十四文字)の体となすものと云はれておる

拙人言正凡神然録に曰く発句景色を必景色ヲ脇人偏人事なりは脇
も亦之に從ふ或は中に僅に事情意味其の発句の機嫌に叶ふ可とす

狂句の木枯の身は竹舟に似たるかな

雜ぢやとはもろ竹の山茶花

○鶯や頼に盡す極の先

○日よこ更直に晝の暖か

○美えき 駒 浮きけり 春の影

柳の葉のかまきりの卵

悪作例 必る湯の音も赤しき茶の向かき

高も客の邊と虫干

○小夜礎 蕪打つ音も南へかり

山嵐空し 雲渡り月

○長肉に 謹初めけり 鶴の歌

度。陽まで届く春風

の名明日枕の入りぬ夜をうけり

虫おもしろく南の明才宿

即ち脇は発句の余情気色の面白なる様にして、脇の身柄持たは脇心に
あらず発句は客の位にして脇は亭主の位かれば己が心をまけても発句に
まいた残さぬ
たる草木山川の一草二草の風情を加へて客の余情を盡すべし

貞吉や海印録に曰く抑々脇とは詠のシテワキと二人してすべし。客かれば客
に従ふ亭主夫に任ずる事の如し。偏に発句の意を汲んで景色馬所人員言
語の姿を立句主の自句に作て付添へる事にて二句合より時は一体となり放
す時は別々となりものなり

然して普通は春季の立句ならば春季夏なれば夏。秋冬とも亦同様の句
を以て受けるとしてあり

前述の譯と作例で稍々層得られたと思ふ(但し三句目の解説は次号に於り

次に課題を提供する。この立句へ諸君の御考のあり所と應募せられたる選
は其の中が最も秀れた作を取て附句とし次回はこの附句に伴ひ第三の句に選
びては元の歩を進めよう。附句は只一句だが佳作はなるべく多く入るやう
に取上げてほしい

◎ 回課題

春日の巻世々集

◎ 金魚屋の桶新しき春日かな

青白堂林石

規定一人三句より五句以内

2. 半紙半折へ雅名を記す

3. 月 日

4. 宛名 大塚内

以下詳しく附方論について述べて見よう

◎ 附方論

芭蕉翁曰く附句は三変なり即ち貞心の物附、漢林の心附、貞心の

- 御音き句ひ
- 貞心の附方
 - (一)てには附
 - (二)地非諧
 - (三)取成付
 - (四)体附
 - (五)心附リ景気
- てには

てには或る動詞に對して之と連想ある名詞を附くる事なり重頼曰く之と
連想ありて非諧付とに分ち説明せし例へば「指すと云ふ動詞」は端
末なぶ名詞を付くが如し又「侍某蜂など」と附くれば非諧付といふ

(二)地非諧
地非諧とはある名詞に對して之と連想ある名詞を附くることなり之も亦連
歌付非諧付の區別あり例へば梅卯の花などを附くるは連歌付と
權正木などを附くると非諧付といふ

(三)取成付
振を取成し(比喩)の向に體言無味と云ふは、無常無常と云ふ類例ありてあり

例へば「乃木みぬる身」の行末。如何なるか
此即ち去つ早雨去来通てけり
。洞とや鬼、眼をへこぼすらん
枝のききに免り朝露

この取成付は古き連歌の附方にて貞心の是も亦之なり

(四)体附
前句の体と云ふものは情類を明に云ふ現世の附方なり此の附句は前句
から始り直接に連想されるやうな事を示せるものなり
例へば「身のしほは只籠れり」
肩重く笑ふ姿顔に笑くは居て
。ついでに思返しも思折る

執事殿に建せて通へる

(五) 心付

支那の故事や詩歌物語のやうに持至つた付方なり故に貞門のさふ心付は
普通の意味の心付(前句の意味上の連想を以て思想の連念)より意味狭し貞
門の心付は付句が和漢の故事に想連し持つたやうな意味を現けず
例へば○龍馬は是に行い教に渡らせし

いたづら者も眠る木の上

(徒然草に木の上に登り龍馬と見せ居る時居眠とした故事)
○親の留守として人の言信

大江山と野の歌と詠み聞かて

(着南某に小太郎の侍が定頼中納言とへにませし故事)
○景気とは景色と附くる事なり例へば

○と真黒雲に月細く見ゆ

余所付未ドクマエマニナ 秋の空

貞門の付方は多く連歌の附方と踏襲せし故に全体が物附
であらざるやへぬ あり句・あり事物と近き連想と有す。事物と
付くる場合もあり前句のあり事物から容易に連想する。附方
をばしたる場合もあり

てには付地俳諧取成付は物付であるが終句の心付も景気は普通にお心付で
な併し之は物附でも意味の連絡がある時だが取成甘などは附意の一向通
せぬことよくある 徳元が俳諧句体は前句の詞とありの事にとりて附付は
やうなうと云つて居るが之が貞とすると貞門の連句はつまらぬものだ

貞門の連句は俳言を用ひし其の見よべきで附方なれば連歌の焼直しとい
て寫し貞徳は用附同意と禁じ連歌で何句去りの物は俳諧は之々に
せよと云り嫌ひの利と喧しく説きわが其の連句は割合に變化なくし
結句の言葉や修辭の重複運用に氣を取られて思意の變化と



詩 · 壇

うす月よ
影もわびしや
うつ心せむきしん
まぼろしをみる

閑却せよ身なるべし (以下次より揚載)

愛と思想

二人の情のよい旅人なる「愛」と「詩」は
天下の公道を通る
此の人生見れば何事も秘せられず
二人は何事も禁ぜられず
自然のあらゆりすみんへ
予予予と取って訪れる

二人は互いのために生れ
二人は互いに心を異しくするものはない
彼らに一つ一つの悲しき悲しきを知りて
扇を打ちあそぶ去る樂もそのなき悲しき
虚偽の仲間もなきられた時
巡禮たちはお互を見失ふ

制限

心水またか水の區別と誰が知らう
きけ壁の中のわがさう立白
吾界が出来てより此方彼はかぎってある
彼の智慧はいつてずさきやり方について
なよもなむじは知つてあるか
此のみちめな小さな作ものも
生命がありこころがあり
こどもがあら親がある
申たか香烟や日や月と
関係をもたねわけてはいい
汝は何者ぞ！彼の瞳のすじは
汝の残酷に對して、残酷をらんだためだ

冬 野

○俺は只一木枯れに吹かれをがう
林しく枯れはてた
野道も黙して行く
十草の花の吹きし寝は
今は唯まわく尾花の袖を
寒く風の吹くのみ
このふに愛は今日の日か
天の風か、はた試練か
人のあはれか、物と子か
天は何もかも暗くをがう
俺は足さ早めた
落ち散った木葉が
かみりとすかすか音を立て

小鳥 献 咲

そして力をく回して
道はた昔むす石よ
吸ひ付く枝にようそつた
春の花よりわもす
くさへ蝶
花を折つて乙女子の
泣きは今は影もなく
唯訪れるは
無情の冬の風のみ
○今はたぐと死のわがな
灰色の野は
俺の心はそれか木だ
冷たく淋しい
そしてたよりない
生きんとする野の草も木も
やがては鬼むん
暖かき春の光
情をかくむせいで
偉大なる土の暖みに
おわらかくのあふ
新芽を芽は
天子向て生を告げよ

冬、イキテ

悲しくも戸の間に暮れる
三味の音を聞くか
哀音が「か」に響きに消ゆる
夜の三味の音も
せげいづきも物も
いかにも淋しくも心は
せいでいづきも物も
夜の少ゆきながれ秋子
悲しくも淋しくも心は
流る路をいづきも物も
しかし自分は何も
そは歎きもてないことと
そしてそれは可愛い少ゆき
微笑であることと

毛須生

愛におのゝく
君のその感激であることと
まげ三味の音も
人生愛着も
悲しくも淋しくも心は
嘆くいづきも物も
一九二〇・一・十六
国交断絶
小鹿野忠夫
なに此の野郎
生意気云ふな
いよく国交は断絶さした
起上つてきまぐら
下駄も振上げる

戦乱はしばらく続く

戦場は……
旅順港か奉天か
いや静かす
そり短気なま
いややと仲裁が入った
お、俺が悪かった
いや、俺も誤った
イは再度の交際も
講話委は
小村侯とウイツラか
いや酔がさめたニ
(完)

四季ながら

春は嬉しや百花爛漫櫻花に脚踏
日影もろく陽炎はひいて
天野見山下がグラウンドに
夕暮れと夕やけを授歌 エーゼ
夏は嬉しや河童と豚小即下の諸川
夜は嬉しや龍が交つて
月下のまはるに走も
秋は嬉しや今白の日和を音等が選手
振る舞をるまに
優勝旗の輝くは
チヨイと大衆をかきかいてエーゼ
冬は嬉しや秋に読む運動會の
其處ら此處らに催され
胸にメダルの輝きて
チヨイと目とひとエーゼ

南の春雨

高麗の川に佇む
積り石の白く
流水行く水音もなし
ふと啼き行く川馬
見送る彼方村屋の
街を照らす電燈も
雨段にむせがばかりなり
冬夜のダンス
香月生
△私は今机の上に本を開いて
見るとぞな
空想に酔かてゐる

半開き窓より

風が襲ふお、風の力
無茶かい、そのかい
聖者英雄、文豪の
いくたりかありと別となく
いづがさす
△私はほほむ空想と景
風がいつしかに止みて
静かさを
こゝろ……い……
何かは知らぬ
さうやまのすれ
そと目とやれ川
真白なる雪のダンス
△お、彼女はおどる

放逸に濃艶

彼の女けおどろ

ふれ合ふ唇の柔かさ

相いだしく心の一いやま

あふはなす肉体的美しく

お、ー彼女はおどろー

△心べう子供如く

清くはなうて

神の息めう夜ふとこうに

平かな高う結ぶ此の夜を

お、ー彼女は自由

最て楽しく喜びし躍狂ふ

△萬象のまては

静かに

彼等濃艶な女性の

乱舞に酔ふておど

△かしてせ長き冬う夜と

かり積む雪の
静かに凍白くせ行く

風は吹き去るころ大空は

雲よりまわりまわす鳥のさけ

鳥雲

雨相濡るこの曉成る鳥か

すうさうと啼うて花は去りま

鳥

時の白き跡はまあるまを

ふと隣に河を啼く

鳥

夕月また照つて月影は

少川の流るるの動く

鳥

去り秋は量るる波は

かゝしつる月を去る

鳥

静かな黄昏の道

小犬は遠く一歩歩も

鳥

かるた會終へて友多成出下し持
 山の端近く月さそふ計り
 月消えて木立のつらなりしを
 夜は子帰れば道々淋しき
 初冬の静けさ日知り右玉す成
 糸は一人下畑に表ぶる

遠
 左
 全
 人

* * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *

命

神小室屋

外套を着て出し顔と襟に理の
 雨滴れの椽に外套干されけり
 衣共。裾に外套かけて林ねにけり
 外套に首埋め行く朝行らけり
 外套の内に持ちをりの玉子 物
 夜業終へ雨予ある本狂茶會哉
 雪降りて林日。覆れ忘れけり
 山越。家道子雪を雪雪
 雪は松高しと春。玉露下す
 朝日とす電線。雪消るるを

三洲 春雨 兎月 五人 吞半 忠夫 武子 秋扇 花嫁 三

越川 謎

電線の風は尾ふき、大野原
風揚子に一ニと競ふ、去
亦切れて行方も知れず、甲
空高く吹上げられし絵、風うな
青空や高き草ふ、風ニニニ
空高く夕陽日映えし絵、風
飛んて午後の静かや町はづれ
風ニニ冬田の果に昇りけり
糸切れて高く飛ひけり、奴、奴
外套に親しむ我、過うまか
外套、雪拂ふに杖、戸口、哉
夜学路や外套着たるニ三人

忠 柳 不 左 春 全 甚 寒 光 忠
夫 志 明 人 人 三 三 月 大

店頭や外套の襟に價札
雨晴水の襟に外套干されけり
夜更裾に外套かば、穴ねにけり
一烈車皆外套をまとひけり
陣営の外套寒き歩、確哉
眠るべく外套行る夜、汽車哉
外套の内に持ちたるか、カ、カ物
外套の肩にか、りしむまぼしり
雪の日や只山門を一人、行く
今日と亦吹雪に暮る、北の町
初雪やこたつ、中、昨、白、会
雪明り学びの窓を照しけり
雪降る、昨日、疲、志、水、けり

忠 春 光 花 全 吞 甚 忠 三 不 不 武
夫 雨 月 嫁 人 半 三 夫 洲 明 明 子

水選

未切れた電線に命からかおし
誰一人着かぬに外套をかき
外套を脱ぐ間に初日見得
雪晴れれば外套干きぬ事
しつら一外套まき美か、り
陣営、外套寒き歩調か
賦うこゝ外套乾く夜汽車
雪、日と只山門と一
今日と亦吹雪に暮る、九、町
雪、初に一燈談し、草、家
葉風名焚し、雪見の友として
雪降りてけ馬に乗る子供哉

不三春三不
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三
三洲三

朝日さして電線の雪おちけり
雪降ゆの庭に餌はむよこか
戸さほる音も寂しや夜、雪
朝咲きて夕去りにけり六、七
不三似た心ばかりなす雪の朝
日曜は空一ぼい、甲り
送られし風けり供り、枕元
風上りや寒さ知らずに暮るまで
甲上りや糸三寸、陽はおちぬ
扇甲穿甲に論風揃へけり
涙高く低く群れ飛ぶ春の夕
さらさら水て枝にからぬる月、甲
おぼさった子の奴甲稗の先

甚三
光月
春風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風

雪江選

高き空に定まり 農家上
 田舎の石の静か かなはす北
 風一ツ空に定まり 日知の至
 風二三冬田のぼるに上りけり
 湯頭の外套の襟に 價札
 夜具裾に外套掛けた 床にけり
 一列車皆外套 成まじりけり
 余は根に雪はや白し 夕まだき
 朝陽のこして 電線に雪落にけり
 雪解て小草に見えたる 日知の香
 竹折れし音も 覺めたる 雪の掃半
 風一ツ空に 掃はれし 日初かな

暮三
 春雨
 秋扇
 乳月
 甚三
 光月
 光月
 忠夫
 松志

越川先生吟

外套成大きき 着たる 病馬の如
 衣は皆外套や 釋の朝
 日当りや 母を了て おちし 雪の雪
 雪卒の 暫くも たちて 栗 氷の
 風張る 木の 椽の 並り 削り 竹
 風張る や 糊の 表の かなばり

選後に

雪江



數十句の中から以上数句を採りました。
 選句の標準が高いのかと思つてもう一度見直し



ましたら、天張り採るのがない、出句者の失望はどんなをだらうと
 思った時、それに選者としての淡い哀愁がある、帰する詩力作
 の句が少ないからです、傳統的の思想、感情、縛る水のお
 ろからず、永遠の處女性に帰水、水が文藝をやるも、
 唯一の標語です。

| | | | | | |
|----|-----|----|-----|----|-----|
| 光月 | 一六頁 | 獻映 | 一〇頁 | 春雨 | 一〇頁 |
| 忠夫 | 九頁 | 甚三 | 九頁 | 花醉 | 七頁 |
| 柳志 | 七頁 | 秋扇 | 五頁 | 三洲 | 五頁 |
| 武子 | 五頁 | 不明 | 五頁 | 吞牛 | 三頁 |
| 枯木 | 二頁 | 孤月 | 一頁 | 寒三 | 一頁 |

天張り採りのがない、出向者の失望はどんをだり、
 淡い哀愁がある、帰すの詩力作
 伝統的の思想感情、結ぶ
 永遠の處女性に帰水、水が文藝といふ
 唯一の標記です



| | | | | | |
|----|-----|----|-----|----|-----|
| 光月 | 一六頁 | 秋咲 | 一〇頁 | 春雨 | 一〇頁 |
| 忠志 | 七頁 | 甚三 | 九頁 | 花醉 | 七頁 |
| 柳志 | 七頁 | 秋扇 | 五頁 | 三洲 | 九頁 |
| 式子 | 五頁 | 不明 | 五頁 | 昏中 | 三頁 |
| 枯木 | 二頁 | 孤月 | 一頁 | 寒三 | 一頁 |

羊 牧

編輯者 埼玉縣入間郡 大家村青年團

代表者 埼玉縣入間郡 大家村厚川 小 將 治

發行者 大家村青年團

(非賣品)

製本 大正十四年二月十九日
 納本 大正十四年二月廿一日
 配本 大正十四年 月 日

終